

放射線環境学レポート課題 「あなた自身ができそうな被災地の農業再生について」

今回の溝口先生の講義のみならず放射線環境学の講義全体を通して最も痛感させられたのは、私たちはあまりに放射線および被災地の現状について理解が足りていないということだ。2011年3月11日の震災およびその後発生した福島第一原子力発電所における事故以降、今日に至るまで被災地や放射線、原発関連のニュースや記事を見ない日は全くなかったにも関わらず、である。今思うと、自分とは関わりのない遠い場所の出来事として（実際にはすぐそこで起きている事態であるが）右から左へ受け流していただけであったように感じる。自分も含め多くの人々がこのような状態であるがために、より刺激的で危機感や恐怖感を煽るような情報ばかりが印象に残りやすくなってしまっているのだと思う。だから福島県産物への風評被害はなかなか止まないのだろう。そして作ったものが売れなければたとえ安全な作物が産み出せても農業が再生したとは言えない。生活の糧として成り立たなければそれは産業とは呼べないからだ。まずは人々に農産物を買ってもらわなければなるまい。

以上の理由を以って私は、自身ができる被災地の農業再生の第一歩として、まずは正しい知識を得るということを挙げたい。曲がりなりにも学生としてある程度勉強してきていて放射線の知識はそれなりにあるつもりでいたが、正直に言うところの授業を受けるまで福島県産物は危ないと思っていた。まだかなり広範囲が高濃度放射能汚染により立ち入り禁止区域になっているし、テレビや新聞は連日汚染水もれを伝え、ネットをみれば盛んに放射線の危険性が声高に叫ばれていた。こういったものを目にしていれば自分を含め多くの人々が福島県産物を避けるのも自然の反応であろう。しかし授業を受けて自分の認識は間違っていたことを思い知らされた。確かに福島県やその周辺地域が放射性物質に汚染されてしまったのは事実であったが、それらが必ずしも避けがたい危険とは言えないことを知ったのである。汚染された田畑は表土剥ぎ取りにより除染が実現されてきている。生産された作物は、残留農薬等ほかのリスク源と比べても厳しい基準で検査されたのち市場に送り出されている。また、放射能を取り込みにくい作物・農法の開発も進んでいる。水産物に目をむけても影響を受けやすい生物とそうでない生物がいることが分かっている。これらのことは授業を通して初めて知ったことだ。授業を受けて、人々が思っているほど福島産物は危険ではないと感じた。このような正しい知識をもっていれば福島産物を強く避けようとは思わないだろう。風評被害も減っていくはずである。まずは自分が福島産物を買うことで再生支援していこうと思う。

第二に、まだまだ駆け出しの身であるが科学に携わる者の端くれとして自分の専門分野からできることを探すのが被災地支援に有効だと考える。土壌学の分野から除染方法の考案および実践を行っている溝口先生をはじめ、講義にいらした先生方の多くはそれぞれ自分の専門分野から放射線問題、被災地問題にアプローチしていた。大学の授業で学生たちに知識を伝えるのもその一環であるといえるだろう。自分は水圏生物学科に進む予定なので、

農業関連よりも水産物への放射性物質があたえる影響についての講義に興味をもち、学部に進んで以降自分が学ぶこともまた生かせるのではないか、そしてそれが科学に携わる者としてできる最も大きな被災地支援ではないかと感じた。まだかなり時間はかかるであろうし、具体的に何をするかは決まっていないが、これもまた農業再生に関し自分ができることであるように思う。